

# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

## 2021

### 〈論文〉

中米イロパango火山の破滅的大噴火は、タスマルを中心とした  
古代都市チャルチュアパを放棄させたのか？  
その大噴火の絶対年代はいつなのか？

..... 柴田 潮音 1

2021年ペルー大統領・国会議員選挙  
—カスティージョ急進左派政権登場の過程と「地方の叛乱」の行末—

..... 中沢 知史 39

現代におけるユカタン・マヤ系先住民間の「好き」に関する考察  
—言語学及び人類学的視点からの意味分析—

..... エリ・カサノバ・モラレス／大倉 由布子 63

### 〈研究ノート〉

戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図

—野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手—

..... 辻 豊治 89

### 〈研究展望・動向〉

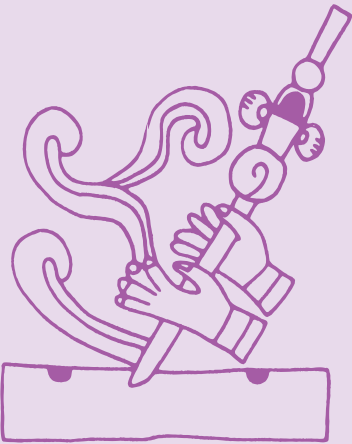
16～18世紀のマヤ研究における考古資料と文献史料の重要性と問題点

..... 白鳥 祐子 105

### 〈書評〉

渡邊利夫著『国際政治のなかの中南米史—実体験を通してリアリズムで読む—』

..... 牛島 万 117



## 〈研究ノート〉

# 戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図

——野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手——

辻 豊 治\*

### キーワード

戦前日本、ラテンアメリカ研究、野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎

### Resumen

Este trabajo de investigación, con el fin de desvelar cómo se percibía, estudiaba e investigaba Latinoamérica en el Japón de la preguerra, indaga qué tipo de documentos se publicaron y presenta su contenido. En este artículo, se desvela en primer lugar, a qué disciplinas pertenecían quienes investigaron sobre Latinoamérica desde el período Meiji hasta el período Showa de la preguerra. Además, se presentan obras de tres de ellos, Ryoji Noda, Kotaro Tanaka y Yoshitaro Amano, autores de publicaciones de alto nivel, tanto en calidad como en cantidad. En referencia a la cantidad, ningún otro investigador tiene en su haber tres o más libros. En cuanto a la calidad, Noda, con un legado inigualable, no tiene rival; publicó 8 libros, que comprenden investigaciones de campo principalmente en Brasil y una enorme cantidad de literatura dentro y fuera de Japón, además de los resultados de la interacción con investigadores locales y occidentales. La “Historia general de Latinoamérica” de Kotaro Tanaka, además de tratar la historia de las instituciones sociales y legales más allá de la generalidad, repasa con precisión las tendencias de la historia de Latinoamérica desde un punto de vista histórico, teniendo en consideración los cambios sociales. Yoshitaro Amano presenta de modo ingenioso la situación de Latinoamérica, con el foco en Panamá. Su obra “Como los araucanos” es un libro histórico único hasta la fecha sobre la historia del pueblo mapuche. Sin ninguna duda todos ellos contribuyeron enormemente en los estudios de Latinoamérica realizados en el Japón de la preguerra.

## はじめに

本研究は戦前日本においてラテンアメリカがどのように認識され、調査・研究されてきたかを明らかにするために、どのような文献が出版されてきたかを調査し、その内容を紹介するものである。前々稿<sup>1)</sup>では江戸期に遡って日本での最初のラテンアメリカ文献を紹介し、さらに昭和期に先行する明治期と大正期を先行研究期と位置づけ、この時期のラテンアメリカ文献を紹介した。前稿<sup>2)</sup>では戦前のラテンアメリカ研究の中心となるのが移民研究であるとの認識のもとに大正末

\* 京都外国語大学名誉教授

期から戦前昭和期までの代表的な移民文献を紹介した。

本稿では明治期から戦前昭和期までのラテンアメリカ研究をどのような分野の人々が担ってきたかを明らかにし、さらにそのなかで質量とも高いレベルの文献を執筆した野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の3人を取り上げ、それぞれの著作を紹介していきたい。

## 1 研究の担い手

まず明治期から戦前昭和期におけるラテンアメリカ文献の執筆者を職種別にそれぞれの経歴を紹介しておきたい（但し、生没年、生誕地について明記していないものは調査中である）。

### 1.1 研究者、思想家

福澤諭吉（1835-1901 大坂）は1859年に遣米使節の一員として渡米し、さらに1861年幕府使節団の通訳として渡欧した。こうした欧米での見聞から日本人の目を世界に向けさせる啓蒙書や思想書を執筆した。『世界國盡』（1869）において独立後のラテンアメリカを日本で最初に紹介した。歴史学者野々村戒三（1877-1973 大分県杵築町）は東京帝國大學史學科を卒業、南北アメリカの歴史を早稲田大學で講じ、その講義録が1903年に『南北アメリカ史』（早稲田大學出版部）として出版された。関西學院、戦後は立教大學でも歴史学を教え、また能学研究でも知られている。井原儀は歴史家、地理学者で『墨西哥事情全』（1914、博育堂）はメキシコ史と日墨関係を詳述している。また『世界近世史』（1904、誠之堂書店）でもラテンアメリカの歴史に触れている。本格的なラテンアメリカ移民研究書『ブラジル移民研究』（1925、東京寶文館）を著した農学者の高岡熊雄（1871-1961 鳥根県津和野市）は、札幌農學校卒業後、同校で農政学、植民学を担当した。北海道帝國大學教授、社会政策学会および農業経済学会会長を歴任した。田中耕太郎<sup>3)</sup>（1890-1974 鹿児島市）は日本の代表的な法学、法哲学者、東京帝國大學教授であった。戦後は文部大臣、参議院議員、最高裁長官を務めた。『ラテン・アメリカ紀行』（1940）は1939年に外務省の後援で中南米を歴訪したときの紀行記である。戦中から敗戦直後に執筆、出版された『ラテン・アメリカ史概説 上下巻』（1949）は戦前のラテンアメリカ史ひいてはラテンアメリカ研究の金字塔である。大川周明（1886-1957 山形県酒田市）はアジア主義を標榜する国家主義思想家であり、拓殖大學、法政大學教授を務めた。法学博士。五・五一事件連座して5年の禁固刑を受けた時に執筆したのが『近世歐羅巴植民史一』（1942、慶應書房）である。福中又次は人類学、日本人論などの研究者で『インカ帝國と日本人』（1940、富山房）を出版している。岡田峻は東京外國語學校西語科卒、善隣外事専門學校教授。スペイン語と歴史学を専門とし、『マヤの文化』（1942、育生社弘道閣）、戦後すぐ『インカ文化史』（1948、美和書房）を出版した。翻訳書が出版されている『ペルー征服（上）（下）』（1941、43、改造社）を著したプレスコット（William H. Prescott, 1796-1859 Salem, Mass.）は19世紀における米国のスペイン帝国史家。ハーバード大学卒。本書の他、『メキシコ征服史』（1843）を著した。『ラテンアメリカ社會發達史』（1942、ラテンアメリカ中央會）のポブレテ・トウロンコン（Moisés Poblete Troncoso, 1893-1972 Chillán, Chile）はチリ大学の農業社会学者である。『中南米發達全史』（1944、國際日本協會）を著したリップィ（James Fred Rippy, 1892-1977 Sumner County, Tenn.）はシカゴ大学、デューク大学で歴史学を講じ、米州関係史を専門とする。

## 1.2 外交官・官吏

藤田敏郎は1891年にラテンアメリカ最初の領事館がメキシコに開設されたときの領事代理であり、ブラジル総領事を歴任した。1924年に『南米の殖民地』（アルバ社）を著している。戦前におけるラテンアメリカ研究の第一人者が野田良治<sup>4)</sup>（1875-1968 京都府綾部）であることは衆目の一致するところであろう。東京専門学校（早稲田大学の前身）英文學科中退、1898年から3年間のメキシコ公使館、10年間のペルー、3ヶ月のチリ在勤を経て1909年以降ブラジル大使館での一等書記官に至るまで36年間、外交官としてラテンアメリカで勤務した。移民事業を現場で指導するとともに日本からの訪問者の対応は言うまでもなく、ブラジルを中心に赴任先を精力的に視察、調査し、その見聞にもとづいて研究・執筆活動を続けた。最初の著作は1912年の『世界之大寶庫南米』であり、1927年に『世界之大寶庫新南米』として改訂版を出している。1926年にブラジル百科事典と言うべき『ブラジル人國記—實査十八年—』、1929年にアマゾン調査をまとめその全体像を明らかにした『大アマゾンヤ』、アマゾンヤ研究の集大成であり、また実践の裏付けである『南米の核心に大奮闘せる同胞を訪ねて』（1931）、外交官を辞した後は博覧強記のエッセー『らてん・あめりか叢談』（1942）、最後の著作としてラテンアメリカ研究の集大成となる『ラテン・アメリカの全貌』を1943年に出版した。その後、ラテンアメリカ中央會の理事として同会の月刊誌『ラテンアメリカ研究』に時局評論やエッセーを寄稿した。戦後『日葡辞典』（1966、有斐閣）を出版した。成川房幸は林業の専門家で農商務省技師として南米各地を視察して『南米事情』（1928、松山高等商業學校）を著す。柳澤健（1889-1953 会津若松市）は通信省から大阪朝日新聞を経て、外務省に入省した。メキシコ勤務にもとづいて『中米及び墨西哥』（1933、平凡社）を著しているが、『ラテンアメリカ總攬』（1944、日本外交協會）にもメキシコについての鋭い歴史評論を書いている。東京帝國大學在学中に島崎藤村や三木露風に師事し、外務省退官後に評論集や詩集を出版している。堀口九萬一（1865-1945 長岡市）はメキシコ、ブラジル、スペインなどの公使を歴任した。『南米及び西班牙』（1933、平凡社）を著している。詩人の堀口大學は長男である。鹽谷狩野吉は農商務省、商工省の官僚。ラテンアメリカを視察して1937年に『中南米の歪像』（日本雜貨中南米輸出組合聯合會）を著す。海本徹雄はサンパウロ領事館副領事を務めた国際法学者で外務省顧問。米州関係、米州法研究の第一人者である。ラテンアメリカ中央會常務理事。『米國のカリビアン政策』（1943、日本外政協會）、『新汎米主義と米州國際法』（1943、日本外政協會）が代表作である。大野勝巳（1905-2006 北海道浜中町）は外務省亜米利加局で対米政策に携わってきたが、1942年に『アメリカの對南米政策』（朝日新聞社）を著し、上記『ラテンアメリカ研究』誌の中心的論客の1人である。入江寅次は移民研究の第一人者で、外務省亜米利加局、移民局、神戸移住斡旋所などに在籍した。『邦人海外發展史 上下巻』（1942、井田書店）の他、『明治南進史稿』（1943、井田書店）、『ブラジル移民五十年』（1958、松沢書店）等を著した。

## 1.3 移民事業関係者

明治・大正期の移民事業の関係者の著作として、皇國殖民を設立して第1回ブラジル移民を送出した立役者である水野龍（1859-1951 高知県高岡郡）の『南米渡航案内』（1906、京華社）、プロテスタント系青年教育団体で移民事業に取組む日本力行會の会長永田稔（1881-1971 東京）の『南米一巡』（1921、日本力行會）、『両米再巡』（1925、日本力行會）が挙げられる。いずれも啓蒙的な移民案内書である。大島喜一は自ら創設した札幌の植民學校講師、北海道海外移住組合専務理

事などを務め、移民教育に尽力した。『邦人の發展地ブラジル』[5版] (1928、東文堂) と『南米アルゼンチン』 (1931、植民社)、戦後『ホセ・サンマルチン』 (1960、政経出版社) を出版した。『ブラジルとアルゼンチン』 (1929、移植民研究會) を著した稲垣穎策は、臺灣總督府や拓務省などで移植民事業に従事してきた農務官僚である。山田辰實は廣島縣海外協會員として廣島縣からの海外移民業務に関わったが、ペルーでの見聞を『南米秘露と廣島縣人』 (1931、廣島縣海外協會) としてまとめた。青柳郁太郎 (1867-1943 東京) は海外興業代表としてブラジル移民の推進に努め、サンパウロ州政府との折衝の先頭に立った。後にラテンアメリカ中央會常務理事を務めた。1941年と1942年に上下巻で出版された『ブラジルに於ける日本人發展史』 (ブラジルに於ける日本人發展史刊行會) の編集委員長を務めた。

#### 1.4 現地在住実業家

田中誠之助はアルゼンチンのミシオネスに植民地を開いて、日本人移民の導入に努めた。1919年に『日本人の新發展地南米ブラジル』 (海外發展社)、1926年には『南米の理想郷』 (日本植民通信社) を著している。ラテンアメリカにおいて実業家として成功し、現地事情に明るい人物の代表は、天野芳太郎<sup>5)</sup> (1898-1982 秋田県男鹿市) である。秋田工業學校卒業。1928年パナマに渡航し、パナマの天野商會を拠点にコスタリカの漁業、チリでは牧場経営、エクアドルでも縫製工場やキニーネ精製事業を經營した。しかし太平洋戦争の勃発により米国に強制連行されたが、この経緯は『我が囚はれの記』 (1943) で明らかにしている。『あちら・こちら物語—中南米隨筆—』 (1936)、『中南米の横顔』 (1941)、『パナマ及びパナマ運河』 (1943)、『アラウカノ族の如く』 (1944) を著し、戦後はペルーやボリビアで事業を再開するとともに、チャンカイ文化を中心とした織物や土器を収集した「天野博物館」を1958年に開設し、ペルー文化の研究、普及に貢献した。ペルー政府はその功績に対して、2018年に「天野博物館創立者」として生誕120年の肖像切手を発行した。千田平一は父平助が1910年にチリに渡り、雑貨店を開いたが、それを受け継ぎさらに農園を営んだ。在チリ28年の後、帰朝した。『中南米をゆく』 (1942、第一書房) でチリの社会事情を紹介している。

#### 1.5 ジャーナリスト、編集者

横山源之助<sup>6)</sup> (1871-1915 富山県魚津市) は横濱毎日新聞記者であり、日本の貧困問題に取り組み『日本之下層社會』 (1899、教文館) を著しているが、1908年に『南米渡航案内』 (成功雜誌社) を、1913年には『南米ブラジル案内』 (南半球社) を著した。伊達源一郎 (1874-1961 島根県) は讀賣新聞主筆でいずれも民友社の現代叢書として『巴奈馬』 (1914、民友社)、『南米』 (1915、民友社) を編集した。両書とも時流にあった優れた評論書である。戦後、緑風会參議院議員を務めた。深尾幸太郎は『植民地大鑑』 (1916、東洋タイムス社) の著者となっているが、東洋タイムス社社長であり、実際は監修者であろう。朝日胤一は雑誌『海外』主幹で『總南米』 (1921、大日本圖書) と『ラテン・アメリカ史論』 (1922、大日本圖書) を著した。前著は日本人移民の在り方を提言し、後著はラテンアメリカ各国別の通史である。『墨西哥・中米・南米篇 (世界現状大観11)』 (1932、新潮社) は歴史を中心としたよくまとまったラテンアメリカ文献であり、編者の佐藤義亮 (1878-1951 秋田県角館町) は新潮社の創立者である。桑原忠夫は東京日日新聞学芸部記者で、社から中南米に派遣されて現地を調査した。『南米の知識』 (1934、非凡閣) はその成果である。後に日本

通信社代表取締役。寺西呉郎は同盟通信社のニューヨーク支局員であり、1939年に『中南米を探る』（同盟通信社）を著している。ガンサー（John Gunther, 1901-70 Lake View, Chicago）は世界各国の政治、経済事情に鋭く迫る米国のルポライターとして有名である。『中南米の内幕』（1942、大日本出版）ではラテンアメリカ全域12カ国を取り上げている。

次に戦前のラテンアメリカ研究において顕著な業績を残した次の3人のすべての著作を紹介していきたい。参考までに各著作の頁数を業績リストに示している。野田良治はブラジルを中心として現地調査と内外の膨大な文献および現地と欧米の研究者との交流を通じて他の追随を許さない業績を残した。田中耕太郎の『ラテン・アメリカ史概説』は概説の域を超えた社会制度史、法制史でもあり、社会変革を視野に据えた歴史観によりラテンアメリカ史の動向を的確に捉えている。天野芳太郎はパナマを中心としたラテンアメリカの実情を軽妙洒脱な筆致で紹介している。また『アラウカノ族の如く』はアラウカノ民族史として現在に至るまで稀有な歴史書となっている。

## 2 野田良治の業績

### 2.1 『世界之大寶庫新南米』（1927）[『世界之大寶庫南米』（1912）]

『世界之大寶庫新南米』は『世界之大寶庫南米』の改訂版である。本稿では改訂版の『新南米』を中心に紹介したい。本書の構成は、歴史、地理・気候、産物、11カ国の各国事情、北米と中南米、モンロー主義と全米主義、言語、文学、交通、日本からの経路、著者の経歴と多岐にわたる。

南米はパナマを含めて11カ国である。地理の項でアマゾン大河とその支流の浸潤区域、すなわちアマゾニアについて「すでに数百名の同胞が・・・農業、商業、手工業等に従事して（いるが）、・・・吾等日本人は、せめてアマゾニアの開発に先鞭を着けねばならぬ」（p.87-88）と後年の著者によるアマゾン論の先駆けとなる認識が見られる。第1回ペルー移民は悲惨な結果になったが、当時在リマ領事館の書記生であった著者はペルー移民を継続すべきとの報告書を外務省に提出した。パナマは運河のために生まれた国であるとして、運河史と運河の構造を説明し、米国の関与について「今より凡二十二年にして、米國は此の運河に費した資金を全額回収したる上、尚年々多額の収益を獲ることゝなる」（pp.252-253）と記している。

モンロー主義は米国人による中米カリブ海での侵略の口実となり、米国への反感が増した。米国はその緩和策として米大陸の利益擁護を米州諸国で負担するという全米主義を打ち出した。

改訂版にはなく旧版の『南米』で言及されていたのは、次の移民関連の5項目である。「南米に於ける本邦移民」「南米に於ける支那人及びその潜勢力」「南米に於ける日本移住反対説と辯護説」「邦人移植上より見たる南米列國」「南米に於ける邦人發展策」。

一般にブラジルには人種的偏見がないと流布されているが、「南米人が濃淡の別こそあれ、多少人種的偏見を抱けることは争い難き事實なり」（p.378）と楽観論を戒めている。今後有望な移植地としてブラジルを推奨し、そこで日本人の資本と実業能力を結集して、一大会社を設立し、貿易、土地売買、農場経営、移植民誘入、銀行業務を統一的に行っていく必要があると提言している。

## 2.2 『ブラジル事情』(1927)

1926年内務省社会局における教化團體聯合會<sup>7)</sup>定例会での講演速記を冊子にしたものである。大西洋側諸国(著者は表南米と呼ぶ)のうち、現在はアルゼンチンが最も発展しているが、やがてブラジルが取って代わる可能性があり、移民先として有望である。今後は資本家や専門技術をもつ人も移住を考えてほしいと呼びかけている。

## 2.3 『ブラジル人國記—實查十八年—』(1928) [初版 1926]

内容は概説、地理、アマゾンの自然、気候、風土病、動植物、産業、人口・人種、国民性、歴史・ブラジル史年表、日伯関係、政治制度、法制度、軍組織、教育、宗教、マスコミ、学界、文学、芸術、スポーツ、ブラジル関係邦語文献リストと文献解題、渡航案内までブラジルに関する情報をあらゆる分野にわたって網羅しており、その幅広さは類例を見ず、いわばブラジル百科事典となっている。

## 2.4 『大アマゾンヤ』(1929)

著者は1906年のペルー・アマゾンへのゴム林踏査を手始めに合わせて4回、アマゾニヤを視察した。さらにアマゾニヤに関する西葡英仏語の文献や公文書を駆使し、また現地のアマゾニヤ学者との交流を通じて本書を執筆した。アマゾニヤについて厳密な定義をさまざまな文献から展開しているが、要約すると極北はブラジルと英領ギアナとの境界にあたるコティンゴ河の水源、極南はボリビアのグワパイ河およびチャボレ河の水源、極東はパラ州の最東部、極西はペルー・カハマルカ県ハエン市周辺で、緯度として24度以上、経度では33度以上に跨る広大な地域である(p.29)。本書の内容について21章の冒頭で次のように紹介している。

以上二十章に亘り、吾人はアマゾニヤの廣袤如何に大なるかを知ると共に、概略ながら之を地質學的、地理學のおよび水理學的に考察し、また歴史的に其の發見、傳説、冒險の乃至學術的探檢、その占領と植民、宣教師の献身的努力の事蹟をたづね、續いて其の住民と氣候風土とを檢討し、またアマゾニヤの動植物、就中文明諸國にとりて不可缺なる種々の原料を供する所の植物性天産物が、・・(如何に)豊富に存在するかといふこと、換言すればアマゾニヤは全世界人類の爲に残されたる最後の大寶庫である事實の一斑を瞥見した(pp.431-32)。・・アマゾニヤに將來の新文明を建設する土臺=基礎工事は既に落成して居る(p.441)・・今や人類のために残されたる最後の「大寶庫」を開かねばならない時機が來ている(p.447)。

## 2.5 『南米の核心に大奮闘せる同胞を訪ねて』(1931)

著者によると南米には先進諸国の文明が浸漸する地域と文明の恵沢に浴さない内奥地がある。「南米の核心」とは、この未開発の「第二の南米」の中核である。著者は「南米の核心」を次のように設定している。「その大部分はボリギア國に屬し、同國領アマゾニヤの全部を包容し、それにペルー領アマゾニヤの一部たるマドレ・デ・ディオス縣の全部と、クスコ縣の一部を合わせ、更にブラジル領アマゾニヤの内マトグロッソ州の西北部をも加へたものである」(p.7)。ボリビア領70万平方キロ、ペルー領15万平方キロ、ブラジル領7万5千平方キロ、合わせて92万5千平方キロとなる。従って「南米の核心」はボリビア領アマゾニヤが主、ペルーが副、ブラジルが従である。著者は「南米の核心」地域を奥アマゾニヤとも表現している。

本書の前編はこの「南米の核心」地域への各方面からの河川、鉄道、道路を利用した交通路について、さらにこの地域の中心となるボリビア領アマゾニアの開発の歴史、その拠点都市の紹介からなる。後編はこの「南米の核心」で活躍する「同胞を訪ねて」、著者による64日間に亘るブラジルからボリビアへの旅の記録となっている。

## 2.6 『らてん・あめりか叢談』(1942)

本書はボリビア、コロンビア、ベネズエラおよびペルーアンデス東部、アマゾニアなどへの視察から得た知見と欧米の著書から「特に面白いと自ら感じた奇習、異俗・珍談を、随筆的に書き綴」(p.4) ったものである。ブラジルを訪れた最初の日本人やパナマ地峡を最初に横断した新見豊前守一行のこと、キューバ独立のきっかけとなったメイン号に乗り組んだ7名の日本人がハバナ湾の底に沈んだことなど日本人の中南米との関わりを紹介している。最終章で米国の対中南米政策に言及し、「米大陸の幼弱國を保護すべき筈の後見役たる北米合衆國が・・みづから侵略的行爲に出」(p.259)る状況に対し、中南米諸国は米大陸の共通利益を図ることが真の意味の汎米主義(p.260)であると説いている。

## 2.7 『ラテン・アメリカの全貌』(1943)

本書の執筆時にはすでに太平洋戦争が始まっていたが、戦況はまだどちらとも言えない時期だったと思われる。冒頭で敵米国の急所がラテンアメリカにあり、この戦争と密接な関係がある、とこの地域を知ることの重要性を強調している。本書はラテンアメリカ入門書であるが、時局の逼迫性が伝わってくる。地理、政治、経済、文化、軍備、対米関係、「大東亜戦争とラテン・アメリカ」、パナマ運河、「戦後に於けるラテン・アメリカの地位」という章立てになっている。

**地理**の項で、メキシコ地図についてグアテマラを頭とし、バリーズ(当時の英領ホンジュラス)を目とする一匹の犬に例えている。著者はメキシコが本来「猛鷲の襲来に對して、ラテン・アメリカ全體のために、監視を怠らざる北境の忠實なる番犬たるべき」(p.35)だが、猛鷲の前に平伏している、としている。

**政治**については、当時のラテンアメリカの20の独立国は、独立当初のハイチ、メキシコ、マクシミリアン皇帝のメキシコ(1864-67年)、1889年までのブラジルの帝政を除き、すべて民主共和国を看板にしているが「看板に偽りあり」(p.84)、実際は「謂はゆる革命」(p.72)が頻発し、独裁政治が蔓延している。現時点(1940年当時)で20カ国のうち11カ国が軍人大統領である。

**経済**からみたラテンアメリカの重要性(特徴)は、①現在から将来にわたって「一大資源圏」であること、②原料生産国として工業先進国との分業関係、③外国の投資先、移民先であること。この三局面について、夫々資源(鉱物、林産物、農牧産品)の賦存状況、その輸出構造、英米を中心とする鉄道・外債・鉱業などへの投資額の分布状況、そして欧米諸国からの人的資本としての移住民について説明している。

ラテンアメリカの**文化**は、スペインとポルトガルの文化に先住民文化の要素が加わって形成され、独立後も受け継がれた。今やラテンアメリカ文学は百花繚乱の状況にあり、幾多の文学者、詩人を輩出している。ただ日本ではスペイン語、ポルトガル語があまり普及していないため、ラテンアメリカ文学が邦訳されることはほとんどなかった。著者はリマの名譽領事館在勤中に『舶來すみれ』と題するペルーを中心とする9カ国の詩人22名の詩34篇を邦訳して自費出版したと



のことである。さらに1941年に堀口大學によるフランス語からの重訳で『現代ブラジル文學代表作選』（第一書房）が出版された。

パナマ運河に関して、両洋の連絡には運河の建設が不可欠であり、レセップスのフランス会社の破綻、イギリスとの利権争い、コロンビア政府との交渉と挫折、パナマ独立と運河利権の獲得という一連の過程を経て、米国主導の運河実現となった。本書では運河の規模、予算、船舶・貨物量など詳細に数字を紹介しているが、さらにパナマ運河がもつ米国にとっての戦略的意味について言及している。パナマ運河自体、人類全体の平和と福祉のためのものであり、一国が専有して「帝國主義的野望を遂行するための具」（p.290）とすることは、容認できない。「パナマ運河を米國から取り上げること」（p.291）がこの戦争の目的の1つである。

「大東亞戦争とラテン・アメリカ」について、1941年に日米開戦すると米国の膝元であるラテンアメリカの動向は重要な鍵となる。結局アルゼンチンとチリ以外の諸国は対枢軸断交に踏み切った。その後チリは1943年1月に断交し、アルゼンチンだけが残った。アルゼンチンが中立を維持しえた背景は、ラテンアメリカの盟主を自負し、米国に依存せずに自給自足しうる経済力をもっているからである（結局、アルゼンチンも1944年1月対日断交を決めた）。ほぼ全域で米国に加担することになったが、戦況如何によっては「枢軸側に寝返りを打つ可能性」（p.258）がある。

今大戦が終局したとき、日本は大東亞共栄圏の盟主となり、また世界の他地域においても同様の広域経済圏が創出されるであろう。米州は2つの共栄圏となり、中南米における22万9千人に上る在留邦人の存在は重要な役割を果たすだろう。この意味でラテンアメリカの同胞を大東亞共栄圏に再移住させる案より、現在地に留まることが将来の布石となろう。

### 3 田中耕太郎の業績

#### 3.1 『ラテン・アメリカ紀行』（1940）

本書は著者が東大教授のとき外務省亜米利加局の委嘱を受け、1939年5月から10月までブラジル、アルゼンチン、チリ、ペルー、パナマ、メキシコを歴訪したときの紀行記である。著者は5ヵ月余りの中南米滞在中に大学・研究機関、行政府、日本人移住地等を精力的に視察・訪問して各国の高官、文化人・学者と交流を図るとともに、講演を合計26回開いている。そのうち在留邦人を聴衆とするものは8回に上り、在留邦人の教育の在り方、民族主義と国際主義、「永住か帰国か」など現地での同化を進める内容のものであった。その現地体験からさまざまな知見を得ている。ラテンアメリカの知的文化的水準の高さ、英米の経済的政治的勢力への反発、高等教育の普及、一部の国の社会立法・社会事業の発展ぶりを看取した。その一方で人種的混交社会としての社会統合の困難さや初中等教育の欠如による民衆とエリートとの格差などを社会問題として指摘している。本書は当時の一般の日本人がもつラテンアメリカは文化や教養が低水準であるという偏見を払拭する役割をもった。

#### 3.2 『ラテン・アメリカ史概説上巻』（1949）

上巻は序説・先住民文明・征服・植民地期・独立までが扱われている。1939年に中南米を視察した際、各国の歴史に関する知識の欠如を痛感し、ラテンアメリカの歴史研究を思い立った。そしてラテンアメリカの歴史過程から日本の在り方についての教訓を引き出すことに心掛けた。300

年の西領植民地統治は、「長年軍部の壓制の下に悩んだ過去の日本を想起せしめる」(p.4) としている。本書は終戦前に執筆を始めた。

先住民文明について、マヤ、アステカ、インカ各文明の興亡を取り上げている。アステカはマヤから芸術的学問的要素、トルテカから行政的要素を引き継ぎ、強固な軍事組織にもとづく専制君主制を樹立した。インカ帝国の政治は温情的な専制主義であり、経済的には稠密な人口を養う農業的共産主義的構造であったが、権力者に対する絶対的服従により個人の文化への貢献の余地はなく、スペインの侵略に抗せなかった。スペイン人は征服後、堅牢な宮殿や外壁を取り除くことが出来ず、それを基礎にしてスペイン的都市を築いた。しかし純然たるインカ都市の面影はマチュピチュ遺跡に残っている。

「コンキスタドーレス」の項では、バルボア、コルテス、ピサロおよび小コンキスタドーレス、そして「マジェランの世界周航」が取り上げられている。続いて植民地統治機構を説明し、ラス・カサスの活動 (pp.150-159) とインディアス新法による先住民保護、イエズス会による布教村の建設、植民地社会の特徴としての階層間対立と地方間対立、大土地所有制、ミタなどの強制労働制、大学・学院、文学・芸術について言及している。「カルロス三世の改革」は植民地の行財政改革を図ったが、「其の本質に於いては本國本位のもので・・植民地を自分に堅く結合しようとする意圖を裏切つて、植民地の分離獨立と云う正反對の方向に驅つた」(p.212)。

「植民地の獨立」では、その要因としてクリオリョ層の台頭など植民地社会の発展、イベリア半島の政治情勢、欧州思想の普及と欧州諸国の支持を挙げている。そしてボリバルとサン・マルティンによるグアヤキル会談は決裂に終わったが、「南下し他は北上する西班牙植民地解放運動の最初の接觸を意味する」(p.304) とその意義を説いている。

### 3.3 『ラテン・アメリカ史概説下巻』(1949)

下巻は「獨立以後」として対米関係を中心とした国際関係と各国事情に二分され、最後に「ラテン・アメリカに對する佛蘭西文化の影響」が付記されている。

獨立時における対米関係の焦点は、米国による 1823 年のモンロー宣言である。植民地化の排除や獨立国への干渉の排除を規定していたが、19 世紀中頃から米国の帝国主義的計画が明らかとなり、モンロー主義がその隠れ蓑になるとの疑惑が生じた。20 世紀には米国によるとくに中米・カリブ海諸国への積極的な干渉主義が台頭した。「痛棒政策」「弗外交」などである。一方、汎米主義の流れはボリバルのパナマ會議に端を発する。ボリバルの汎米主義は西系諸共和国のみの結合を求める「アメリカ主義」であり、米国とブラジルを除外するものであった。しかし 1933 年米国の善隣政策以降は米国とブラジルを含む汎米主義として定着した。

「各国事情」では、2 ヶ国以上に跨る重大事件、人物中心の政治過程の素描を行うとした。構成はラプラタ地方、太平洋諸国(チリ、ペルー、ボリビア)・太平洋戦争、アンデス諸国(エクアドル、コロンビア、ベネズエラ)、メキシコ、中米諸国及びパナマ、カリブ海諸国、ブラジルからなる。

### 3.4 『ブラジルからメキシコへ』(1958)

本書は戦後の著作であるが、著者のラテンアメリカとの関わりを知るうえで紹介したい。1957 年にブラジル裁判官協會の招待でブラジルは固より米国、ベネズエラ、パナマ、グアテマラ、メ

キシコを訪れたときの旅行記である。1957年では未だ「勝ち組」「負け組」の抗争が収まっていない時期であり、日本文化協会での講演では国粹主義を戒め、第二の故郷であるブラジルへの愛国心もち、一致協力してブラジルのために尽くすよう呼びかけた。グアテマラの政情について1954年に成立したアルベンス政権下で国際共産主義の間接侵略を許容したことが政権崩壊に繋がったとし、従来の反共自由主義の立場からの歴史観を示している。

## 4 天野芳太郎の業績

### 4.1 『あちら・こちら物語—中南米随筆—』(1936)

表題の「あちら・こちら」には著者との関わりが深いパナマ、チリ、エクアドル、ペルーを始めとして各国事情が135篇の短文にまとめられている。また「あちらとこちら」という項には15の文章が日本との習慣の違いをテーマとしている。

「住みよいパナマ」では、日本は天変地異が頻発し、気候も悪く、自分の国を世界一の健康地と勘違いし、「いろいろの薬品を携帯してくる」(p.26)。「パナマに住んで、あの蒸し暑く寝苦しい日本の夏に、ひそかに同情を寄せてある」(p.28)。「大西洋は太平洋よりも日本に近い」では、日本からの船は太平洋岸のバルボア港から7～8時間かかって運河を通過して大西洋岸のクリストバル港に着くが、経度ではクリストバルの方が20分日本に近い。これは運河が日本に引き返す方向に切られているからである。チリについては四季と温泉に恵まれ、「南米の日本」として賞賛し、日清戦争時にチリから軍艦エスメラルダを譲り受けたのが、軍艦和泉であると記している。「南チレの獨逸植民地」であるバルディビア州はチリ国内に建設された小ドイツ共和国である。ドイツ移民はチリ人との協調を図っており、著者にとっては理想的な植民地経営と映っている。「肩身の広い野口町」では、エクアドルのグアヤキルに野口英世を記念する野口通りがあることを紹介している。「マチュピチュ物語」では、著者も1935年にこの地を訪れ、「世界的な名所として、各国から多数の観光客を引付けるのも遠くない」(p.279)と予見している。

「あちらとこちら」では、日本人移民が「幾らかの貯蓄が出来たら故郷へ歸ろうと、一日一日を犠牲にして働いてある」(p.301)のに対し、欧米移民は「適度の労働、適度の休養、適度の娯楽、これが彼等の理想である・・・どちらが合理的であるか、・・・優勝者は殆ど彼等だ」(p.301-302)と意識の違いを論じている。「日本人排斥の原因」では例えば、以前パナマの漁師は僅かの魚を取って生活していったが、日本人の漁師が大量に捕獲すると魚の値段は安くなるばかりで、彼らの生活が成り立たなくなる、事ほど移民問題は簡単なものではない。

### 4.2 『中南米の横顔』(1941)

本書は1928年以来、13年間のラテンアメリカ生活から得た見聞を88項目に亘ってエッセーにまとめている。中南米原産の食品、煙草、キニーネ、ゴムなど日本人が恩恵を蒙っている「我々の生活と中南米」から始まり、メキシコの遺跡、コスタリカの風物、気候、人種、死生観、動植物についてのエピソードを綴っている。著者は古代文明と征服史に並々ならぬ関心を持っており、「傳説の山」「日と月のピラミッド」「黄金の等身像」「マチュピチュ物語」(『あちら・こちら物語』から再録)「芋とインカ族」「石油とインカ族」「印度人とコロンブス」などで言及している。パナマ運河開通に先立つ126年前に大西洋側のアトラト河と太平洋側のサンファン河を結ぶ通路とし

てラスパドウラ運河が1788年に建設されていた。しかし次第に地盤が緩み、雨期のたびに溝が埋まり、その存在は忘れ去られた、と「死んでしまった運河」で紹介している。本書はいわば『あちら・こちら物語』の続編のような内容で、ラテンアメリカへの日本人の関心と理解を高めることにめざしたエッセー集である。

#### 4.3 『パナマ及びパナマ運河』(1943)

永年パナマにて実業に従事した著者の現地体験にもとづく啓蒙書である。本書は敵国民として収容され、日本に帰国後の執筆である。

大東亜戦争においてパナマは日本に宣戦布告した。当時のパナマについての日本での認識は、パナマ帽とパナマ運河である。いずれもパナマのものではない。パナマ帽はコロンビアやエクアドルで生産され、またパナマ運河は米国領土内にある。まずはパナマ国とパナマ運河を明確に識別することが重要である。国の形状は尺取虫が南米から中米に渡っている恰好である。本書ではパナマの経済、社会、生活状況について現地在住者ならではの具体性をもって描かれている。パナマ運河は交通の要衝であるが、その重要性は軍事的なものとなっている。米国の対中南米政策はパナマ運河の防衛を軸に展開している。

#### 4.4 『我が囚はれの記』(1943)

本書は著者がパナマ在留中、太平洋戦争勃発時に逮捕、抑留された後、米国の収容所に移送、交換船で帰国するまでを綴った体験記である。

著者は日米戦争が始まる1941年12月7日(日本時間8日)に日本人が拘束される報に接し、自ら警察に出頭して他の日本人とともにチョリリヨス監房に拘束された。そして米軍の統制下バルボアの移民収容所に移送され、116日間の天幕生活を送ることになる。パナマ各所から送られた日本人150人とともに空腹と疲労に苛まれ、不当な労働を強いられた。著者はパナマ日本人社会の指導者として当局にスパイ容疑を掛けられ、とくに虐待に晒された。翌年一行はクリストバル港から米国オクラホマ州フォート・シル収容所に移送された。この収容所にはパナマ・コスタリカ組184名の他、ハワイからの169名、カリフォルニアからの346名が収容された。50日間のフォート・シル生活の後、さらにルイジアナ州リビングストン収容所に移送された。米国での67日間に及ぶ不自由な抑留生活は、総勢1065名を乗せた第一次交換船が1942年8月19日横浜港に帰還して、終止符が打たれた。

本書はラテンアメリカでの日本人に対する強制収容の実態を克明に記録した貴重な証言であるとともに、天野芳太郎という人物の人生観、国家観、処世観を知るうえで重要な資料でもある。

#### 4.5 『パナマを中心とせる中南米事情』(1943)

帰国後、東京、大阪、札幌、朝鮮などの28の経済倶楽部での講演記録である。まず米国によるラテンアメリカ支配の急所であるとしてパナマ運河の重要性を強調し、米国との関係を中心にラテンアメリカ各国の政情に言及した。また抑留体験に触れ、最後に、対米戦争に関連して日本の旗が米国の旗に「俺が今、東の空から登るところだ。星よお前引っ込め・・・と言ってゐる」(pp.23-24)という例え話をメキシコの新聞記事から紹介している。

#### 4.6 『アラウカノ族の如く』(1944)

アラウカノ族はチリ南部に居住する先住民でスペインの侵略に最後まで抵抗した勇猛な民族として知られている。著者がこの民族のことを知ったのはチリ第3の都市コンセプションの郊外に農場を買い求めたとき、その地がアンダリエンという名のスペインとの古戦場であったという関わりに因る。以来、事業の傍ら資料の収集に努め、アラウカノ民族史として本書を公けにした。

チリ南方コピアボからビオビオ河の間に居住する部族をピクンチェス（北の人）と呼び、ビオビオ河からバルディビアにかけてはベウエンチェスが、バルディビアからチエロ島に及ぶ地域にはウインチェス（南の人）が居住していた。彼らは共通する言語、習慣をもちマプーチェ（その土地の人）と自称した。本書では3地域の民族をアラウカノとし、その生活や制度を紹介している。スペインによる進出は、1535年のアルマグロのチリ遠征に始まる。その後、1540年にバルディビアが150名の兵士を率いてピクンチェスを鎮圧し、翌年サンティアゴ市を建設した。この頃バルディビアは南方アラウカノの存在を知り、スペインによる最初の侵略が1550年に行われた。アンダリエン河谷での会戦でアラウカノは2千の死者と4百の捕虜を残して敗走した。スペイン人はこの地にコンセプションという名で植民都市を築いた。しかし1553年、総大将カウポリカンの下で戦略家のラウタロの一軍がバルディビア軍を打ち破り、彼を処刑した。スペイン軍は翌年弔い合戦を仕掛け、マリグエ坂に野営したが、ラウタロの戦略により敗走した。「マリグエの戦いは南米征略史上最大の敗戦であった」（p.137）。一進一退の戦闘を繰り返しながらアラウカノの地からスペイン人は一掃された。1641年にはキジン河の溪谷で和平条約が結ばれた。歴史家はスペインがペルーで得た富をアラウカノとの戦いですべて失ったと言う。「中南米諸國の獨立を容易ならしめたのは實にアラウカノ族だと云う事になる」（p.178）。1818年のチリの独立とともに彼らはその一部となった。

#### 4.7 『遙かなる國々—中南米隨筆—』(1947)

『中南米の横顔』(1941) 88篇から68篇を選んだエッセー集である。

### 結びに代えて（3人のラテンアメリカでの出会い）

本稿では戦前日本のラテンアメリカ研究において傑出した3人の著作を紹介した。彼らは外交官、法学者、実業家と立場は異なるが、共通してラテンアメリカへの共感を以って、日本におけるこの地域への関心を高めるのに尽力した。野田良治の著作の底流にある考え方は移民推進論であり、とくにアマゾン植民の有効性、反米意識にもとづくラテンアメリカ（現地）主義ということになる。田中耕太郎においてはカトリックの役割、民衆の動向、自由民主主義と独裁の変遷を軸にラテンアメリカ史を再構成しようとした。天野芳太郎においては文化・国民性への関心、先住民文明の再発見、パナマ運河を巡る動向が著述の源泉である。

最後に田中耕太郎がこの地域に密着して活動し、研究した天野芳太郎および野田良治とどのように出会い、どう評価したかについて紹介しておきたい。

田中は1939年ラテンアメリカ歴訪の帰路、パナマに立ち寄った。9月19日運河鉄道パナマ駅に出迎えたのが天野芳太郎であった。翌日、田中は現代日本の精神生活について講演したその夜、天野から晚餐に招待された。翌日パナマ空港で天野の見送りを受けた。『ラテン・アメリカ紀行』

では天野について3頁(pp.423-425)に亘って経歴やその人物像を紹介し、「氏はよく集めるのみならず、よく散ずるを以って知られる」(p.425)と、社会事業や文化事業への貢献を高く評価した。さらに天野の中南米随筆集『あちら・こちら物語』について軽妙な諧謔に満ち、真摯な読書に裏打ちされた観察がなされている、と評した。

また、田中は2度目のラテンアメリカ歴訪の際、1957年12月18日にサンパウロ総領事官邸における夕食会で野田良治に会っている。『ブラジルからメキシコへ』では次のように野田を紹介している。「外務省に勤務し、その間ブラジルで在留邦人の世話をやき、日伯親善のための大いなる功労者である。終戦後、八十をこゆる老齢で再び来伯し、日伯辞典の編纂その他で活躍していることは、日伯人の驚歎の的となっている」(p.194)。

## 注

- 1) 「戦前日本におけるラテンアメリカ研究 (I) — 江戸期・明治期・大正期における先行研究を中心に—」『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要』、(京都外国語大学ラテンアメリカ研究所)、19号、2019年12月1日。  
[https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou19\\_03.pdf](https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou19_03.pdf)
- 2) 「戦前日本におけるラテンアメリカ研究 (II) — 大正末期～戦前昭和期における移民研究の進展—」『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要』、(京都外国語大学ラテンアメリカ研究所)、20号、2020年12月1日。  
[https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou20\\_06.pdf](https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou20_06.pdf)
- 3) 中川清「田中耕太郎博士とラテン・アメリカ— 戦前期の日本とラテン・アメリカ—」が田中耕太郎とラテンアメリカの関係に触れている。
- 4) 神戸大学経済経営研究所の中南米文庫に野田良治の欧語文献を中心とする寄贈図書が収められている。野田良治については、自著でのメキシコ在勤以降の経歴紹介(『世界之大寶庫南米』pp.405-412)の他、『東京外語スペイン語部八十年史別巻』において永田寛定による小伝と業績への言及がある(pp.35-42)。野田が翻訳した詩集『舶来すみれ』(1903年自費出版)について、この時代にスペイン語詩の邦訳があることは「日本の近代文学史上の驚異であろう」(p.41)と高く評価している。同詩集の内容については本稿(p.95)を参照。
- 5) 尾塩尚『天界航路—天野芳太郎とその時代—』は天野芳太郎伝の決定版である。また『南風光砂—天野芳太郎生誕100周年記念誌—』は家族始め関係者の追想録で、年譜と著作一覧が付記されている。
- 6) 横山源之助は片山潜とともに日本における労働運動の創始者の1人であり、下層社会のルポを通じて貧困問題に取り組んだ。後半生はブラジル渡航を機に南米研究に従事した。本来、思想家に分類すべきかもしれないが、ジャーナリスティックな手法での著作が数多く、(1.5)に分類した。横山源之助における日本の貧困問題とラテンアメリカ研究の関連については稿を改めて論じた。
- 7) 国民の道徳向上、思想の善導、社会の改善を目的として1923年に内務省の肝煎りで創設された団体、1928年に中央教化團體聯合會となり財団法人化された。

### 野田良治の業績

- 1912年『世界之大寶庫南米』、博文館（494頁）。  
1927年『世界之大寶庫新南米』、博文館（524頁）。  
1927年『ブラジル事情』、教化團體聯合會（51頁）。  
1928年『ブラジル人國記—實查十八年—』、博文館、[初版1926年]（652頁）。  
1929年『大アマゾンヤ』、萬里閣書房（447頁）。  
1931年『南米の核心に大奮闘せる同胞を訪ねて』、博文館（422頁）。  
1942年『らてん・あめりか叢談』、十一組出版社（266頁）。  
1943年『ラテン・アメリカの全貌』、遠藤書店（313頁）。

### 田中耕太郎の業績

- 1940年『ラテン・アメリカ紀行』、岩波書店（682頁）。  
1949年『ラテン・アメリカ史概説上下巻』、岩波書店（785頁）。  
1958年『ブラジルからメキシコへ』、春秋社（358頁）。

### 天野芳太郎の業績

- 1936年『あちら・こちら物語—中南米隨筆—』、(フンド・アンダリエン主人の筆名) 誠文堂新光社（345頁）。  
1941年『中南米の横顔』、朝日新聞社（293頁）。  
1943年『パナマ及びパナマ運河』、朝日新聞社（80頁）。  
1943年『我が囚はれの記』、汎洋社（246頁）。[『わが囚われの記』、(解説 増田義郎) 中公文庫、1983年]。  
1943年『パナマを中心とする中南米事情（經濟俱樂部講演）』、東洋經濟新報社出版部（25頁）。  
1944年『アラウカノ族の如く』、汎洋社（202頁）。  
1947年『遙かなる國々—中南米隨筆—』、日本ブック・クラブ（212頁）。

### 参考文献

天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会編

1998 『南風光砂—天野芳太郎生誕100周年記念誌—』、天野博物館友の会。

尾塩尚

1984 『天界航路—天野芳太郎とその時代—』、筑摩書房。

立花雄一

1980 『評伝横山源之助—底辺社会・文学・労働運動—』、創樹社。

\_\_\_\_\_ (編)

2005 『横山源之助全集（第7巻）殖民一』、法政大学出版局。

2005 『横山源之助全集（第8巻）殖民二』、法政大学出版局。

「東京外語スペイン語部八十年史」刊行会

1982 『東京外語スペイン語部八十年史別巻—人物と業績—』、響文社。

永合正和

2011 『日本人ここにあり—アンデス文明研究の先達、天野芳太郎氏を思いて—』、文芸社。

中川清

1995.2.1 「田中耕太郎博士とラテン・アメリカ—戦前期の日本とラテン・アメリカ—」、『白鷗法學』、第3号。





# BOLETÍN del

**Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto**

**Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto**

## 2021

### < ARTÍCULOS >

¿La erupción catastrófica del Volcán Ilopango en El Salvador Centroamérica habría forzado a los habitantes de Chalchuapa a abandonar el centro ceremonial Tazumal?, ¿Cuál es el fechamiento absoluto de la erupción volcánica?  
..... Shione SHIBATA 1

Elecciones Generales de Perú de 2021:  
el proceso del surgimiento de la izquierda radical y el futuro de la “subversión  
de provincias”  
..... Tomofumi NAKAZAWA 39

Reflexiones en torno a la significación de frases de “gusto” en maya yucateco  
actual: una perspectiva lingüística y antropológica  
..... Elí CASANOVA MORALES/Yuko OKURA 63

### < ESTUDIOS PRELIMINARES >

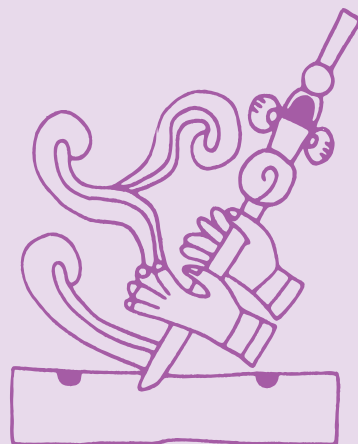
Esbozo de los estudios latinoamericanos en el Japón de la preguerra  
— Los logros de Ryoji Noda, Kotaro Tanaka, Yoshitaro Amano y otros autores —  
..... Toyoharu TSUJI 89

### < INFORME DE INVESTIGACIÓN >

The Use of Both Archaeological Data and Historical Documents  
in Studies of the 16th-18th Century Maya: Importance and Issues  
..... Yuko SHIRATORI 105

### < RESEÑA DE LIBROS >

*Historia latinoamericana en la política internacional:  
a través de la perspectiva de realismo basada en la experiencia real* por  
Toshio Watanabe  
..... Takashi USHIJIMA 117



Vol.  
**21**